

独柳（杜牧）

煙を 含む 一株の 柳

地を 払い 風に 揺ぐこと 久し

佳人 折るに 忍びず

悵望して 纖手を 回す

含煙一株柳 拂地揺風久
佳人不忍折 悵望同纖手

解説 芽吹いたばかりの柳のかたわらに立ち、思いにふける美人をうたった詩

語釈 ※独柳 孤獨な柳。孤獨な女性の象徴。 ※煙 かつみ。もや。芽吹いたばかりの柳の枝を形容したもの。 ※揺 揺うごく。ゆれうごく。 ※佳人 美人。 ※悵望 悲しげに遠くをながめやること。 ※纖手 細くしなやかな手。美人の手のこと。

通釈 春がすみのけぶるように、ポーツとかすむ柳の枝。その柳の枝は地を払うようにやさしい春風にゆれ動いてなんともいえない美しい風情である。美人はその柳の枝を折ろうとして折るに忍びず、美しく細い手をもどして、悲しげに遠くをながめやっている。